

2021年11月28日（日）主日朝礼拝説教

『時が来れば』井上隆晶牧師
イザヤ 55 章 8～11 節、ルカ福音書 1 章 5～20 節

①【信仰とは待つこと】

今日から四週間、キリスト教の暦で「待降節」（ラテン語でアドヴェント）という時に入ります。「待降節」という字は「キリストの降誕を待つ時節」という意味ですから「待ち望む」ことに意味があります。2000 年前にキリストが来られた時、待っていた人たちはごく僅かの人だけでした。多くの人は救い主を待つのに疲れ、待つことを辞めてしまい、キリスト以外の救いを求めて動いていました。でも、イエス様はもう 2000 年前に来られたのだから、もう待たなくてもいいじゃないか、という人もいると思います。しかしイエス様は「もう一度来る」と約束されました。それを再臨といいます。だから今の私たちも「待つ」ことを求められているのです。ペトロは「いつも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れる時に与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」（1ペトロ 1：13）とっています。信仰生活の目標とはキリストの再臨を待つことなのです。このように待降節は、2000 年前に来られたキリストを覚えると共に、やがて来られるキリストの再臨を待つという両方の意味を持つのです。

②【人間の正しさは神の前では耐えられない】

そこで今日は、「待ち望んだ」人たちの一人である、祭司ザカリアと妻エリサベツのお話をしたいと思います。聖書を見ると「二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。しかし、エリサベツは不妊の女だったので、彼らには子供がなく、二人とも既に年を取っていた。」（6～7 節）と書かれています。二人は神の前に正しい人で、神が定めたことをすべて守り、非のうちどころがない模範的信者でした。しかしこの夫婦には子供ができませんでした。祭司ザカリアは香を炊く当番になり、聖所に入って香を炊いていると、大天使ガブリエルが現れ、香壇の右に立ちました。ザカリアはそれを見て、「不安になり恐怖の念に襲われ」（1：12）しました。神の戒めをすべて守り、非の打ちどころの無い人なのにどうして不安になり恐れるのでしょうか。このことはザカリアの正しさは、人間の中では優れたものであったかもしれませんが、神の前では通用しないことを教えているのです。人の正しさとは所詮、どんぐりの背比べです。人間はその神様の正しさの光に耐えられないのです。だから神や天使が人間の前に姿を現す時、「恐れるな」というのです。律法を守ることから来る正しさに平安はありません。人は自分の正しさを握りしめて神の前に立つと、必ず崩れます。神の前には、自分の正しさを捨てて立たないといけないのです。

③【神の御心に適った形で祈りはかなえられる】

大天使ガブリエルは続けてこういいました。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名づけなさい。…」(13 節)。しかし、ザカリアは天使に答えました。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」(18 節) ザカリアもエリサベトも「子どもを与えて下さい」と長い間祈ってきたことでしょう。しかし願いはかなえられず、やがて高齢になり、祈りは忘れられたと思います。しかしここにきて彼らの願いがきかれます。「あなたの願いは聞き入れられた」何という嬉しい響きでしょう。本来ならば大喜びするはずですが、でもここには素直に喜んでいないザカリアがいます。神様のなさることを素直に「はい」と受け入れられない彼がいます。皆さんならどうですか？素直に喜べますか？若い時に願いが聞かれたら嬉しかったのに、この歳では子育ても大変だし、体力もないし、どうしよう、と思いませんか。私たちは簡単に神様にお願い事をしますが、神に願う以上、神の御心に適った形で願いは聞かれるのだということを忘れてはいけません。渡辺和子シスターがこんなことを書いています。

● 「私は『いただく』という言葉が好きで、日常会話の中でも、できるだけ使うようにしています。『くださるものをいただく。しかも、ありがたくいただく』このような心で祈る時、その祈りは必ず、神に“届く”と思うのです。届いたということは、決してそのことがそのまま叶えられる結果になるということではなくて、神がその時、その人にとって一番“善いこと”をしてくださるとのことなのです。…『たしかにいただきました。ありがとうございました』と、神様のくださるもの一つ一つを、しっかりいただいて感謝する“心”こそを、私たちは真に祈り求めるべきなのでしょう。」

④【時が来れば実現する神の救いの業】

大天使はザカリアに言います。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝える為に遣わされたのである。あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」(19～20 節) ザカリアは子どもが生まれるまで口が利けなくなりました。「信じなかったからである」とあるので、神様の罰のように聞こえますが、そうではないでしょう。人間は「神様のなさることに対しては口出し禁止。ただ黙って、神様がなさることを見ていなさい」ということなのではないのでしょうか。正教会訳ではこうなっています。「**我はガブリエル、神の前に立つ者なり。使いを奉じて汝に告げ、汝にこの福音をなす。**」「喜ばしい知らせ」というのを「福音」と訳しています。英語では「good news」です。「福音」つまり、神が人間にしてくださるすばらしい知らせに対しては人間は一切口出ししてはいけないのです。それはただ喜んで受け入れることなのです。エリサベトが「命を宿さなかったこと」も、ザカリアが「天使を恐れ、口が利けな

くなったこと」も、人間の業の限界を意味しています。どんなに戒めをきちんと守っても、そこには恐れはあっても喜びがないのです。喜びと命は人間が何かが出来ることの中にあるのではなく、神のなさることの中にあるのです。

「時が来れば実現するわたしの言葉」と天使ガブリエルはザカリアにいいました。いくら信じられず、受け入れられなくても、神の福音はザカリアの上に行われていきました。私たちも同じです。私たちが信じられず、よく分からなくても、神様の救いの業は私たちの上に必ず成就するでしょう。神の言葉というのは、時が来たら必ず実現するのです。人間のいかなる条件も関係ないのです。神様がザカリアのような高齢者をあえてお用いになるのも、エリサベツのような不妊の女性をあえてお用いになるのも、「神の救いの業が人の力や行いによらず、神ご自身によって進められるため」なのです。救いは人間の中から出て来るものではなくて、人間の外からやってくるからです。あなたの周りがいくら真っ暗闇のような絶望的な状態であっても、目が覚めて見たらある日突然、光に変わっていたということがあるということなのです。明日、神様が何かを起こしてくださるかもしれないという希望があるのです。

●今から約 180 年前、尾張から米を積んだ千石船が嵐に遭い、1 年二か月漂流した後、アメリカの最北端フラッター岬に流れ着きました。その時、生き残っていた人は 14 名の内、3 名だけでした。彼らは原住民に捕えられ奴隷となりましたが、それを知った英国の商船が彼らを助け出し、日本に送り届けることにしました。三人を乗せた船は、ハワイを経てロンドンに寄港し、ケープタウンを廻ってマカオに着き、そこに滞在していたドイツ人宣教師ギュツラフのヨハネ福音書の和訳を手伝うことになります。これが初めての日本語の聖書でした。しかし鎖国をしていた日本は三人を受け入れず、彼らは母国を目の前にしてマカオに帰ってゆきます。三浦綾子さんは「海嶺」という小説を書くため、三人の足跡を尋ね、彼らが最初に漂流したフラッター岬に行きます。すると、その砂浜に、日本製の牛乳シャンプーの罐と、ゴキブリ殺虫剤の罐を見つけました。日本からこの海岸まで潮が流れていたからです。三浦さんは「たとえ、どんなに辛かろうと、じっと時を待っていたなら、必ずアメリカの海岸に辿り着くと知っていたら、もっと彼らは生き残っていたに違いない。…私たちはしばしば人生の航海に行き悩むが、行きつくところは天の港だと確信していたら、もっと喜んで、平安に生き得るのではないか。」と言っていました。

聖書ははっきりと「時が来れば実現するわたしの言葉」と伝えています。救いはもう決まっているのです。神が約束されたからです。約束された方は真実な方です。どうかそれを信じて、心安らかに希望をもって今の時代を生きたいと思います。